

春さきの朝のこと

小川未明

青空文庫

そと 外は寒いけれど、いいお天気でした。なんといつても、もうじ
 き、花が咲くのです。わたしは、遊びにいいこうと思つて、門から往
 来へ出ました。すると、あちらにせいの高い男の人が立っ
 ます。いま時分、戦闘帽をかぶり、ゲートルをしているので、
 おかしく思いましたが、
 「さて、この人は、復員したばかりでないのか。そして、たず
 ねる家がわからぬのでさがしているのではないか。」
 こう、考えなおすと、私は、しばらく、そのようすを見まもつ
 たのでした。どうやら、この人は、頭の上のさくらをながめてい
 るのです。

「ああ、ぶじに帰かえつて、母国ぼこくの花はなを見るみのが、なつかしいのだらう。」

こう思おもうと、私わたしは、その人ひとの気持きもちちに同どうじよう情じやうして、そばへ、いきたくなりました。私わたしはつい、近ちかづいて、いっしょに立たちながら、枝えだを見みあげました。いつのまにかつぼみは、びっくりするほど、大おおきくなつていました。下したを通とおつても、気きがつかかなかつたなあと、思おもつていと、

「つぼみのさきが赤あかくなりましたね。」と、ふいに、おじさんが、私わたしに、話はなしかけました。

なんだか、私わたしは、うちとけた気分きぶんになれて、

「おじさんは、いまごろ復員ふくいんなさつたの。」と、聞ききました。

「そう、けさ、ついたばかりさ。しかし、花をこうして、二度見られるとは思わなかったよ。」

おじさんは、私を見て、ほほえみました。

「きみ、学校は何年生になったの。」

「五年生。」

「そうかい、ほんとうに、子どもだけは、いいな。」と、おじさんは、いいました。

「どうして、子どもだけがいいの。」と、私は、聞きかえしました。

「きみ、ちつと、ここへかけない。」と、おじさんは、かきねの外がわの、切り石の上へ、自分がさきに腰をおろしました。けれ

ど、私は、その前に立つて、おじさんの顔を見ていました。

「子どもを、すきなわけを話そうかね。それは、どこへいつても、

子どもは、しようじきで純真だからさ。こちらへ、帰ってみ

て、おどろいたのは、だれにあつても、こせこせして、顔にやさ

しみというものがない。戦争前までは、あれほど、礼儀正しか

つたのがと、なにかにつけ、昔が思いだされてなさけなくなる。

戦争は、形のあるものを焼いたりこわしたり、したばかりでな

く、人間の心の中まですさまじってしまったのだ。いま、ここに

立っているちよつとのあいだも、いやなことばかりだよ。」と、

おじさんがいきました。

私は、いまと聞いて、どんないやなことが、あつたのか、知り

たかつたので、

「どんなこと。」と、おじさんに、聞き^きました。きつと、おじさんは、教^{おし}えてくれるだろうと思^{おも}ったから。

「このごろは、あきすや、どろぼうが、横^{おうこう}行^{こう}するといふから、むりもないが、ここを通^{とお}るものが、みんな私^{わたし}の顔^{かお}をつめたい目^めつきで見^みていく。そうかと思^{おも}うと、まだ働^{はたら}きざかりのわかものが、きよろきよろした目^めつきで、道^{みち}に落^おちたものをさがしながら、わき見^みもせずつきあたりそうにしていった。あれが、ひろい屋^やとかいうんだね。まったく、なさけなくなつたよ。もし、きみがやつてこなければ、さびしかつたよ。きみは、ぼくの心^{こころ}がわかつたよ。うに、いっしよに、花^{はな}をながめてくれた。これで、やつと、すく

われたというものさ。」

わたしは、こう聞くと、きのどくに思いました。やつと、遠方から帰ってきて、同情するものがなかったら、力のおとしようは、どんなかと思うからでした。

このとき、おじさんは、たばこを出して、マッチをすりました。その青い煙が、毎夜の霜にやけて、赤くなつた、さつきの木をかすめて、ゆるくながれました。

「おじさんのおうちは、どこななの。」と、私は、それを知りたかつたのです。

「こちらで、戦争にいくまで、働いていた工場は、どうなつたかと、すぐ見にいったのだが、あたりは、まったく焼け野原

になつていた。しかたがない、これから、いなかへ帰るよ。」

「おじさんのいなかは、どこなの。」

「ずっと北きたの寒さむい国くにだ。まだ、雪ゆきがあつて、花はなどころではないだろう。それからみれば、きみたちは、あたたかなところに生うまれてしあわせなものさ。学がっこう校から帰かえるとどんなことをして遊あそぶの。」と、おじさんが聞ききました。

「ぼくたち、こまをまわしたり、ボールを投なげて遊あそぶよ。」と、私わたしは、答こたえました。

「そうかい。どこの子こどももおんなじだね。ぼくなども、夕ゆう焼やけのした、春はるの晩ばんがた、お寺てらの鐘かねのなるころまで、よく、かくれんぼうをして遊あそんだものだ。そして、おそく帰かえつて、しかられた。

あんなおもしろかったことは、もう大きくなつてからない。きみも、よく勉強べんきやうをして、よく、お遊びあそび。」

わたしは、いいおじさんだなあと、思おもいました。おじさんは、思おもいだしたように、

「さくらの花はなざかりもきれいだが、すももの花はなざかりも、きれいなものだよ。」と、その景色けしきを目めにうかべるように、しみじみとしたちようしで、いいました。

わたしは、まだよくすももの花はなを知らしないので、想そうぞう像ざうがつきませんでしたが、

「白しろい花はな。」と、聞ききました。

「まっ白しろで雪ゆきのような花はなさ。それが満まん開かいの時じぶん分ぶんはちようど、一

村が銀世界となる。中国のいなかには、すももばかりの村
 があるよ。すももの木に馬をつないで、休んだときのことだ、村
 の子どもがおおぜいそばへよつてきて、はじめは、えんりよして、
 だまつて見ていたが、すこしなかよしになると、馬に乗せてくれ
 といつてきかない。そのようすが、あまりむじやきで、かわいい
 ので、つい一人乗せてやると、こんどはおれの番だ、おれにもと
 いて、つぎつぎに前へ出る。しかたがないから、公平に、か
 わるがわる、乗せてやると、なかには馬をひいて歩かせてくれと
 いうのもある。子どもは、しようじきだ、思ったとおりなのだ
 な。ただ一人、どうしても、馬に乗らない子があつた。乗せてや
 るといつても、あとずさりする。どこにもこういう気の弱い子が

いるものだ。その子は、いちばんかわいらしい女の子みたいな、顔をかおしていた。国はちがっても、人にんじょう情や、子どもこの遊あそびに、ちつともかわりはない。たとえ、おとなどうしが、けんかをして、子どもこどうしは、関かんけい係なく、いつだってお友ともだちになれるよ。」と、おじさんは、心こころが明あかるくなつたような、話はなしをしてくれました。

こう聞きくと、私わたしは、なぜおとなどうしは、たがいに、りくつをいわなければならぬのだらうと、ふしぎな気きがしました。

「世界せかいじゆうの子こどもが、もう戦せんそう争はしたくないと、お友ともだちになれればいいんだね。」

私わたしは、波なみのかがやく、遠とおい海うみのあちらの、美うつくしい花はなの咲さく国くにを

おも
思いました。

「ああ、そうだとも、そうだとも。そうすれば、きみたちの時代じだいには、いやな戦争せんそうというものがなくなるのだ。」

おじさんは、戦場せんじょうのことでも思おもったのか、ちよつとさびしい顔かおをして、ためいきをしました。それから、立ちあがりました。「きみは、からだに気きをつけて、よく勉強べんきょうをして、いい子こになつておくれ。」と、おじさんは、いいました。

「おじさん、もういくの。」と、私わたしは、なんだか、別わかれるのが、かなしくなりました。

「これから停車場ていしやじょうにいつて、汽車きしやに乗のるのだよ。こちらへきたら、また、あえるかもしれない。」

おじさんは、ちよつと、私わたしに、会えしやく釈して、あちらへ去さりかけました。私わたしが、ていねいに頭あたまをさげて、いつまでも、うしろすがたを見送みおくりました。

「ああ、またあえるというが、それは、いつのことだろう。」

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「小学五年生」

1949（昭和24）年4月

※表題は底本では、「春《はる》さきの朝《あさ》のこと」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春さきの朝のこと

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>